

ジャパン

～日本美術でつながる世界～

美術教育監修・執筆

上野行一

一年間、さまざまな視点から美術について学んできた。あなたの美術を見る目はどのように変わっただろうか。今回は日本の美術について、その特質を海外からの影響と世界に与えた影響というポイントから学ぶとともに、これからの日本美術を考える。

学習前
チェック!

色と形、光と影という表現の要素、文字やプロダクト・デザイン、ファッションなど生活に結びついた美術、写真、アニメ、映像などの新しい表現の方法。美術の世界は広い。もっとも興味をもったのは何か、さらに学びたいことは何かなど、これまでの番組を振り返ってみよう。

海外からの影響

我が国の美術の歴史を語る際に、海外からの影響を過大に語る傾向がある。島国という地理的に閉鎖された条件がそう思わせるのだろうが、陸続きの大陸であれ島国であれ、異文化の影響、異民族との交流は、文化や美術の歴史を考える前提ともいえる。

もちろん、日本の美術を異文化との交流を抜きにして語ることはできない。朝鮮半島からの文物の流入と、その後の中国からの影響などは弥生時代から始まっている。しかし、大切なことは、そうした異文化との交流によって逆に民族の文化的な特性が明確に現れるということだ。

たとえば日本の絵画の歴史を振り返ってみても、唐絵に対しての大和絵、漢画に対しての和画と、中国の絵に対して常に自国の文化特性を主張してきた。対象の本質を描くことや画家の精神性を重視した唐絵に対し、柔らかな線描と美しい色彩、装飾を凝らし視覚的な美しさを追求した大和絵は、甘美、かざり、あそびと称される日本美術の特質を際立たせている。

独自の文化をもたない民族はない。文化にはその民族のアイデンティティーが息づいている。美術はその具体的な表れなのだ。

日本美術が世界に与えた影響

高級磁器で知られるドイツの名窯マイセン。マイセン窯と特につながりが深いのが日本の有田焼の窯元だ。17世紀半ば、オランダ東インド会社が有田に磁器を大量に注文し、ヨーロッパで人気を博するようになった。マイセンは輸入磁器に学び、ヨーロッパで最初に白磁をつくり出す事に成功、1720年代から柿右衛門写しの磁器をつくるようになる。その製法は英国チェルシー窯やフランスのシャンティ窯など各地に伝播した。

一方、有田はそもそも中国の景德鎮窯の染付を模倣した産地であったが、磁器の輸出開始以来、形や色彩に独自の意匠を凝らし、高度な技術と品質を追求するようになる。交易によって有田焼の進歩が促されたということである。

このように文化影響は双方向に働くものであり、日本美術が海外に与えた影響を考えるときも、双方を俯瞰してみる視点が大切だ。

日本美術のこれから

美術を語るときに陥りやすいのは、美術そのものに目が向くあまり、美術を取り巻く文化や社会、産業、政治などへの視線がおろそかになることだ。美術それ自体の姿や歴史だけにこだわって、未来の日本美術のあり方も見えてこない。

これからの社会は予測がつかない社会であると言われる。技術革新、産業構造、情報の量や^{でんぱ}伝播の速度、生き方や生活…さまざまなことが劇的に変わる変換点にいま私たちは向かおうとしている。さまざまな変化に目を向け、視野を広くもって美術の行く先を見つめていきたい。

